

を作ったり、伊勢集の語彙索引を作ったりした大冊だった。「有島武郎」をやった田代君の印象に残った。第二回は、高梨桂子君たち二十何人かだった。ここでは、木崎尚君の「源氏物語における紙と書」という論文はよかった。第三回は豊田澄子君など七人。ここでは人数が少なかったもので、しょっちゅう旅行をした。歌を作ったり、文学論をやったりした。豊田澄子君の「業平」木上真知子君の「千里」は印象にのこる。豊田君の美のまとめ、木上君の比較文学的研究は労作だった。四回の佐藤順子君たちは十四人だ。これは何となくとぼけた組であったが、仲よい仲間だった。稲葉優子君の「源氏物語の音楽」は労作だった。資料が忠実にあつかわれていた。木崎君と同じように資料のたんねんなあつかいがよかった。大島真知子君の「詞花集の表現工学的研究」は音調表現にとらえられた詞花集の前代と集以後の推移をあつかった、丹念な作業だった。「永福門院研究」は、西山公子、小田倉裕子君二人が別々に出した。西山君は自分の筆を縦横にふるった。小田倉裕子君はおとなしく無難にまとめた。

今年は七人、来年は六人、ことによると一六人になる。遠くなり近くなるみの浜千鳥ふえたりへったりするものたのしみといえはたのしみでもある。

私のみた卒業論文

——中世

田尻 嘉信

ことしもあと十日ばかりで卒業論文のメ切期限がやってくる。こ

の時期になるとさすがに学生の方も気が気ではないらしい。

この数年、いわゆるゼミで「新古今和歌集演習」を受けもって、私も卒業論文をいくつかみてきた。六、七十枚から中には二百枚に近い大冊もあった。それでも近代文学などに較べると、数はぐっとすくないようである。平安末期から中世にかけてが対象になるが、ほとんどが新古今の時代を書いている。

聞いてみると、毎年のことながら何を題目に選ぶか、それが一番の悩みのようにみうけられる。この段階の和歌は、日常生活との直接的な関連を断ち詩的世界を意識的に作り出そうとしたものである。それを「王朝の美学」などというとかわかったような気がしても、やはり実際にはいまの生活や意識との接点になるようなものがない。さて何を書いたらいいのかというところとなるのである。式子内親王・俊成女・宮内卿といった「女流」の歌人を対象にした論文がめにあつたのは、それなりに納得するところがあるからである。世の女流研究者が対象を選ぶ場合にはたらく共通の心理といえるかもしれない。ほかには西行・俊成・後鳥羽院・定家・家隆といった歌人が対象となっている。

資料的にも恵まれ、参考文献も多い著名歌人への関心が深いのは当然であろう。しかし多くの場合、歌人・歌風の解明が公式的な概観の程度に終わっているのは惜しいことであった。その点では、歌語を丹念に調査して隠岐配流を契機とする院歌風の変貌を明らかにしたり、出詠歌会の勝負や判詞から女流歌人の中における俊成女の評価を探ったり、屏風歌から歌の色彩感を求めたりしたゆへに苦勞がにじんでいるようにみえた。

撰集の基礎となった五十首歌・百首歌や歌合・歌論書などに交替

する流派や個々の歌人の隆替を調べたり、撰集を頂点とする歌壇の推移を考えたりしてもいい。また歌題・句調・修辭・本歌取・切継などからさらに幽玄・有心の詠歌理想やその後代への影響といったことをあげてみると、対象と方法とはまことにさまざまであつた。く尽きるところがないといつていい。これまでみたかぎりでは、いまあげたような歌論的視野に入る問題をとりあげることがすくなかつたようである。

卒業論文を読んで

——近世

小川 辰雄

私は国文学科を卒業した者くらい因果な者はないと思う。というのは、同期に卒業した仲間で学生時代からずっと今日まで変らない交際をしている者が、東京を中心にして十数名はいる。それが何かというときと会合したり、お互の書齋を訪問し合つたりする。その会合での話題は何時でも日本文学に関するものになる。時にとんでもない、経済界や政治外交問題に進展することはあるが、又何時の間にか文学の世界に逆戻りしている。この仲間はすべての者が教員という訳ではない。財界で相当の地位にいたり、政界で活動している者も数人はいるのである。

ある日、財界で活動しているY君の家を訪れたことがある。彼の応接間で半日程過したのであるが、約三千冊もあろうか、彼の蔵書の大半が国文学の分野で占められていたのである。

彼は忙しい野暮用での明暮れだが、出来るだけ暇をつくつて卒業

論文で手がけた分野とその周辺の研究に打込んでいる。忘れようとしても、どうにもならぬ業のようなものだと話していた。それはほんの一例にすぎないが、すべての仲間がそうなのである。

この点は、今の卒業生も、そうなのではないだろうか。

そこで私は卒業論文について、生涯離れることの出来ない国文学なら、自分の力の限界までやってみようといふことである。で、この卒業論文作成こそ、生涯の研究の土台造りということになるのである。よしんば、そこまでゆかず、土盛り作業であつてもいい。それはすぐ崩されるようなものであつてはならない。

これは私のしつけられた態度なのだが、もの発生から展開の相を体系的に有機的に理解してゆくことである。だから私は常に、余りに小さな主題を深くやるより、大きな主題を選んで、その時代その時代の展開の相を史的に精確に把握するよう勤める。というのは業とも云えるこの執着から逃れるすべのない分野を選んだ以上、生涯続くであろうこの生活の第一の一里塚までの道中ともいへば、卒業論文作成だけは力の限界まで努める必要があるからである。

前書きが長すぎた。今までの数十名の出来はどうだったか。極めて少数の者を除いての出来は、まあこれでいい、と考えている。唯、毎年少しずつでも良くなって来ていることである。論理の進め方も、資料の使い方も、上手になって来ている。

中には、例外は勿論ある。後輩連衆に見られては困る作品もある。だがここで私は強い反省をしいられる。毎年上昇する度合が、私の研究密度の上昇に平行しているといふことだ。

強い自責の念を持つと同時に、生涯離れることの出来ない私の業を執念深く生き抜く覚悟をすべきだといふことである。